

## 平成 28 年度 学校法人みどり学園 事業報告

### I 法人の概要

#### 1. 沿革

本学園は、設立者平尾マサノが、終戦直後の大阪府布施市において、幼児教育の施設がほとんど無く、子どもたちが路傍に放置されている状況を見て、幼児期からの集団保育の必要性を痛感し、地域住民の協力を得て昭和 24 年 5 月に岸田堂公民館を借用し、約 40 名の幼児の施設として発足したことに始まる。その後園児も増え現在の園地に移り、昭和 28 年 6 月大阪府認可幼稚園となる。昭和 55 年 1 月に大阪府認可幼稚園から学校法人立幼稚園に設置者変更。平成 14 年 4 月には大阪総合福祉専門学校での福祉専門職の教育を発展させることをめざして大阪健康福祉短期大学を設置し、時代の要請に応え、介護福祉学科（昼間部・夜間部）を開設。平成 18 年 4 月に子ども福祉学科を増設。平成 22 年 4 月に介護福祉学科 I 部別科を設置した。平成 24 年 3 月、介護福祉学科 II 部を閉科した。平成 25 年 4 月からは介護福祉学科 I 部を介護福祉学科に名称変更した。平成 26 年 4 月から介護福祉学科の入学定員（60 名）を 40 名に変更し、現在に至る。大阪健康福祉短期大学は、教育環境の整備、財務基盤の強化のため、現在の校地・校舎を売却し、新たに堺東学舎、堺市駅前学舎、鳳学舎を確保、平成 28 年 4 月移転した。

#### 2. 学園教育目的

本学園は、教育基本法及び学校教育法に従い、学校教育を行い、人間らしく生きることが出来る未来社会への希望を託せる人材を育成することを目的とする。

#### 3. 設置する短期大学・幼稚園及び入学（園）定員、学生（園児）数の状況〔平成 29 年 5 月 1 日現在〕

(1) 大阪健康福祉短期大学（大阪府堺市堺区南花田口町 2 丁 3-20 三共堺東ビル）

学科名	収容定員	現 員	入学定員	入学者数
介護福祉学科	80 名	24 名	40 名	7 名
子ども福祉学科	160 名	105 名	80 名	43 名
介護福祉学科別科		10 名		

(2) みどり幼稚園（大阪府東大阪市寺前町 2 丁目 2 番 12 号）

	収容定員	現 員
みどり幼稚園	95 名	95 名

#### 4. 役員・評議員の概要〔平成 28 年 5 月 1 日現在〕

理事長：平尾達夫

理事 8 名（定数 9 名）、監事 2 名（定数 2 名）、評議員 20 名（定数 21 名）

#### 5. 教職員の概要〔平成 28 年 5 月 1 日現在〕

	教 員	職 員
大阪健康福祉短期大学	19 名	9 名
みどり幼稚園	11 名	2 名

## II 事業の概要

### 【法人本部】

2015 年 4 月に、みどり幼稚園は国の「子ども・子育て新システム」構想に沿い、新たに幼稚園型認定子ども園として発足し、2 年が経過した。2016 年度の入園児数も定員を満たし、ようやく園としては落ち着いて保育に取り組むことができた。振り返ると、認定こども園にして最も良かった点は、職員数を増やすことができたので、年度初めでも子どもが以前ほどパニック状態になることが少なくなり、落ち着いた保育ができたことである。反面、保育単価が一人ひとり違うので、事務量が增大して煩雑になり多忙になった。

大阪健康福祉短期大学は、2016 年 4 月に学舎を移転して、堺市駅前学舎、堺東学舎、鳳学舎の 3 箇所に大学校舎を分散させたが、施設設備の充実をはかったため、賃借料が当初の計画より大幅に増えた。それに加えて、学舎が分散したことによるリース料などの委託費が大幅に増え、入学生の減少と合わせて当初予算の支出を大幅に超過する原因となった。

2016 年 7 月 10 日に提出した経営改善計画について、12 月 13 日に私学事業団によるヒアリングを受けた。そこでも懸念されたのは、学生募集——特に介護福祉学科の学生募集の見通しだった。経費削減のために、教職員数を抑え経費を削減しても、学生募集が成功しない限り財政改善は見通せない。大学教職員にもこの点は共通認識になっていて、最重点課題として学生募集に全員で取り組んだが、残念ながら、入学者は前年度を下回る結果になった。移転に伴う不利な条件を抱えていたので、ある程度の入学者減少は覚悟していたが、子ども福祉学科はほぼ予想どおりとしても、介護福祉学科の落ち込みが想定を大きく下回る結果となった。民主団体や実習施設などに、学生募集の協力を申し入れる活動を始めて、まだ効果は期待していたほど上がっていないが、来年度以

降の学生募集につながるように、この取り組みを強化したい。

## 【大阪健康福祉短期大学】

### 1. 本年度の特記事項

#### ・短期大学基準協会による第2回第三者評価を受けて

第1回第三者評価を受けてから7年目にあたるので、2016年10月5日から3日間、日本短期大学基準協会による2回目の評価を受けた。学舎移転をした年なので、受け入れ体制を整備するには苦勞したが、学長を先頭に評価委員会を中心として全教職員で準備に当たり、なんとか3名の評価員を迎える環境を整えた。

幸い大きな問題もなく無事に認証されたことは喜ぶべきだが、これに要した時間や費用、ALOをはじめとする教職員の苦勞を考えると、素直に歓迎できない面もある。特に、この外部評価を受けるにあたって、施設整備のために当初計画を上回る賃借料の支出をしたことが、決算で想定以上の赤字を生み出す一因になった。

しかし、これだけの努力をして得た成果なので、今後これをどのように生かすのか、理事会はじめ全学の課題としたい。

### 2. 学生募集に関する取り組み

2016年度入学者数は、両学科とも定員充足はできていない。子ども福祉学科は43名。介護福祉学科は定員の半数を確保できず7名にとどまっている。

#### ・介護福祉学科

介護福祉学科を受験する学生は、相変わらず全国的に減少している。高等学校を訪問すると、減ったとはいえ一定数の介護福祉士を目指す生徒はいる。このような生徒を励まして、わが国の高齢社会の担い手として育てるためには、将来の待遇改善と就学援助の制度づくりが必要である。2020年度までに介護現場で働く人材が8万人近く不足すると言われていて、国も介護職の待遇改善を考えているようだが、伝えられるように一人当たり月額1万円程度の引き上げでは、問題解決にはほど遠い。行政の援助はどうしても欠かせないが、本学としても独自に方策を立てて受験者獲得に取り組んだ。

その一つの試みとして、本学が厚生労働省から専門実践教育訓練講座（介護福祉士）指定校に認定されているので、専門実践教育訓練給付制度を活用する社会人入学を促進するために、協力依頼を実習施設中心に行った。結果としては、この制度の利用者は両学科で数名にとどまったが、ハローワークでもこの制度の問い合わせが増えているようなので、引き続き民主団体や実習施設の協力を得ながら取り組みを強化したい。

2016年度大阪府委託訓練事業〔介護福祉士養成科〕（定員20名）を受託できたが、2017年度は、残念ながら受託できなかった。民間の求人状況改善に伴って、受講希望

者も減っているのです、来年度以降もあまりこの事業には期待できない。

2016年度に初めて取り組んだ事業だが、(株)ユーキャンと提携して、介護福祉士国家試験受験者のための「実務者研修」を、土、日コース（定員80名）で4クール、平日コース（定員30名）で1コース、いずれもあべのハルカスを会場として開催した。いずれのコースも定員を満たし、成功裏に終了した。2017年度もこの事業継続の契約を結んだが、介護福祉士国家試験4の受験者が半減していることが影響して、受講希望者は大幅に減少しそうだ。

かなり規模の大きな取り組みで、財政的にも収益は期待できるが、それ以上に本学の介護福祉学科を周知させる機会になることを願っている。

#### ・子ども福祉学科

ここ数年間、比較的順調に受験生が集まっていたが、2016年度入学者は43名であった。やはり、移転に伴う減少があったことは否定できない。

入試に向けては、新しい学舎に受け入れた学生の満足度を、どのように上げていくかが鍵になる。学生と対話をし、意見や要求に耳を傾け、少しでも大学生活を環境面で快適に送れるように整備することが重要になる。

3年目を迎える「幼保特例講座」は本年度も開催したが、受講者が減っている保育士コースは閉じて、幼稚園教諭コース（定員80名）のみ1クール実施した。本年度の特徴は、堺市が市費で市立保育所の保育士に、本学の幼稚園教諭コースをまとめて受講させたことである。

#### ・オープンキャンパス

本年度は会場の大きさや、見学させる設備等の関係で、それぞれの学科が別の会場、別の日程で開催することになったが、全日程のうち、数回は両学科が同じ会場で行った。

オープンキャンパス委員は、毎回必要な人数を確保するのが実習等の関係で厳しい状況であるが、両学科で調整しながら委員の協力を得られるようにした。オープンキャンパス参加者には彼らの説明や対応が最も印象に残り、本学を受験する動機になっているので、委員の協力を得ることが不可欠になっている。

年々、参加者が増加傾向になっていたが、残念ながら、本年度は参加者が減っている。

#### ・入学試験

短期大学の場合は、学生募集はかなり早い時期から始まり、12月までにほぼ終了する。そのために、本学では9月までオープンキャンパスを頻繁に開催し、各種の入学試験を組み合わせで行っている。

AO入試	7月から受付、年間4回行う。
指定校推薦入試	10月から12月に3回行う。
公募推薦入試	11月～1月
社会人入試	11月～3月
社会人自己推薦入試	11月～3月

一般入試	2月～3月
------	-------

高等学校新規卒業者を対象に行う入学試験では、ほとんどの高校生はAO入試か指定校推薦入試のどちらかを受けている。したがって、12月までにこれらの試験に受験者がどれくらい集まるかが、その年度の学生確保の鍵になる。

・その他の取り組み

- ・進路指導担当者との懇談会      5月に本学で行う。
- ・高等学校訪問                      全教員で、主として6月以降と1月に行う。
- ・業者が仲介する説明会          各高等学校で行う場合と、会場形式で行う場合。
- ・本学見学者への応対              年間を通じて来校者には説明。

### 3. 大学行事

本年度の主な行事は、次のようなものがあった。

・教職員ガイダンス

新採用の教職員を含めて、毎年4月の第2土曜日午後に教職員全員参加でガイダンスを開催する。前年度の取り組みを総括し、新年度の課題を明らかにして目標を全員で共有する。

・教職員研修会

7月末の土曜日午後に、教職員全員が参加して行う研修会である。当面している課題からテーマを決めて報告し、全員で協議して問題意識を共有できるようにする。教員と職員が一同に会して行う研修会は、大学では珍しい行事のようだが、本学では開学以来、毎年継続している。

・大学祭(健福祭)

10月最後の土・日曜日に、学生協議会を中心にクラスやサークルで取り組む行事である。本年度は初めて東雲公園を借りて野外で開催した。好天気恵まれて、家族や近隣住民の参加で賑わい盛況であった。内容的にはさらに工夫が必要だと思われた。

・市民講座

本学の実践研究センターが主催して、講演を年3回開催してきたが、本年度は移転の関係もあって実施は予定されていなかった。しかし、法人主催でハルカス大学と銘打って、3月末に学長による講演会を開催した。

・ケアワーク研究大会

専門学校当時から継続して行ってきたが、本年度は移転の関係もあって実施されていない。伝統ある行事なので、来年度はぜひ復活したい。

・ベトナムとの交流ツアー

開学以来、毎年度継続してきた「日越有好交流ツアー」は、昨年度に引き続き、学生の参加希望者が少なくて実施を見送った。サイゴン大学の連絡窓口が転々として定まらず、本学との交流について意欲的ではないと判断されるので、国際交流委員会では、新たな提携先も

含めて、国際交流の進め方を再検討する必要だと考えている。

#### 4. 今後の課題と展望

経営面では経営改善計画を実施することと、分散した新しい大学をどのようにまとめ、発展の軌道に乗せるかが最大の課題となっている。

教育と研究重視の大学づくりをめざして、本学の設立理念や教育方針を見つめなおし、初心に立ち返って大学のあり方を考え、新しい大学像を世間に知らせるために、総力を上げなければならない。

ようやく繋がりができ始めた高校とはさらに関係を密にし、実習施設とは学生を共に育てる認識を共有するなど、本学の価値を広く市民に知らせる取り組みが必要になっている。

みどり幼稚園との関係づくりについて、毎年のように指摘を受けているが、本学の音楽専任教員や非常勤講師などが、ここ数年間、みどり幼稚園に招かれて演奏会を行って、参加者からも好評を得ている。専任教員が転出し、新しい教員を迎えたが、ぜひこの音楽会は継続させたい。

実習施設や就職先としても、学生たちが関心を持ち始めている。距離は離れているが、このような取り組みを通じて関係が深まることが期待される。本年度卒業生が1名、みどり幼稚園の職員として採用された、

最後に、法人がせっかく取得しているあべのハルカスの利用法を、早急に検討する。本年度は介護福祉学科が(株)ユーキャンと提携して介護福祉士国家試験受験者のための実務者研修に使用するが、まだまだ利用の余地があるので、周知を集めて有効活用を考えたい。

### 【みどり幼稚園】

#### はじめに

平成27年4月1日付で認定こども園みどり幼稚園として大阪府知事より認定され(大阪府指令子育第3087号)2年目を迎えた。

新制度の補助金申請業務や保育者利用料の徴収のしくみをまず理解することから始まった初年度を終え、2年目を迎えた本園年度は昨年の反省をもとに徴収方法や提出フォームを新たに整理作成して臨んだ1年であった。結果かなりの部分で決算時期の整理が容易となったが、一部整理が行き届いていなかった部分が見つかり来年度の課題となった。

保育内容については、本園は認定こども園の幼稚園型認定こども園であり、施設設備もこれまでのままで満3歳児からの保育を担う幼稚園であるので、保育内容、保育理念ともにこれまでとまったく変わることはなく、創立67年の伝統を引き継ぎ、職員一同

時代の要請に応えることができた。

## 1. 教育・保育方針

### (1) 教育内容

#### ① 社会性・精神的な成長

どの子ども内面を十分育ててくれたと確信している。子どもなりに人格を感じる子どもも育っている。

#### ②. 運動操作性・肉体的な成長

卒園発表会で倒立側転、蝶、荒馬の表現、塀乗り越えなど男児女児ともにみどりっころしい体力を発揮した。ただ園と家庭の協力関係のもと、具体的にほめて、励まして子どもの能力を引き出す過程で保護者の協力・理解が得にくい子どもが、逆上がりで弱さが出てしまった。

#### ③. 基本的生活の定着

昨年同様、春と秋の生活点検月間の取り組みにより適切な生活習慣を身に着けて就学前の子どもらしい基本的生活を定着させることができた。

#### ④. 知識・先行体験

朝の会での実験で不思議体験をいろいろ見せることができ、将来の科学教育での知的好奇心を高める基礎ができた。また、土曜日の預かり保育であるサタデーレインボーでは、少人数且つゆったりとした時間の中、日ごろの保育では経験できないような手作り石窯でのクッキングやマーブリング、ビーズペンダント等たのしい製作の時間も子どもたちに体験させてあげることができた。

#### ⑤. PTA活動、親と保育者のパートナーシップ

今年から始めた部分参加型 PTA 活動は 1 年間を通して固定の役員数を減らして、イベントごとにお手伝いできるスタッフを募る PTA 方式である。お仕事等で忙しい保護者でもこの方式だと 1 年間拘束されるというストレスもなくイベントの時期だけお手伝いに参加でき子育て仲間にも出会えるメリットはそのまま維持できるということで始めた。

結果、夏の盆踊・夜店・花火の会、運動会の設営、進行、お正月のドッチボールと焼き芋大会、親子卒園茶話会等例年通りのイベントがすべてこの方式で取り組まれ、どのイベントも温かい雰囲気子どもたちと保護者の皆様の笑顔が見ることができた。幼稚園生活は、子どもはもちろんお父さんやお母さんにも楽しんでもらいたいという本園の願いが各イベントを通じて達成されたことが本年度も実感できた。

### (2) 国際交流保育

昨年と同様に、各年齢とも週一回の<sup>ワンツースリー</sup>123ミック英会話授業を実施。楽しく歌ったり動いたりゲームをしたりして、自然に本場の発音に触れさせ、ハロウィンパーティーなど楽しく取り組む中で、身振り手振りで英語を試す機会をつくり、異文化に親しみこれ

からの学ぶ意欲にもつなげ、年度末には写真入の英語課程修了書(Certificate)を出した。

### (3) 安全・防犯

#### ① 「命の札」

登園時に子どもを預けた保護者が受取り、降園時にその子どもと引換に札を帰すシステム、昨年に引き続き気を緩めることなく「命の札」を徹底継続した。

#### ② 避難訓練・防災対策

火災非難訓練、地震避難訓練、暴漢乱入対策訓練を本年度も各期に継続し、子どもの避難誘導練習とともに全職員の「刺又」を使っての対暴漢防御訓練も定期的に行った。ネット銃、男性職員は防刃ジャケット、防刃グラブ、警棒などの防御装置も活用し、より安全な園を目指した。

### (4) 教員体制

平成 28 年度も 3 クラス(年長 1、年中 1、年少 1) 年少は 2 グループ体制

常勤保育者は園長 1 名、副園長 1 名、副園長補佐兼英会話担当 1 名、主幹教諭 1 名、指導教諭 1 名、年長組担任 1 名、年中組担任 1 名、年少組担任 2 名、フリー教諭 1 名の 10 名、

非常勤教諭 1 名、パート教員 3 名

## 2. 運営・経営

### (1) 園児募集

私立幼稚園では保育所と違って行政の定員超過管理が厳しく、とりわけ少園児数園での調整は難しい。本園ではいつも通り園児募集の受付では待ち組が出るが、本年度の受付(昨年秋)でも、他園では幼児の発達や適性の試験をるところがあるが、幼児期の子どもを試験することの困難さと、発達の多様性の大きい幼児期に試験はなじまないのではないかという職員集団の考えから、幼児を対象とするのではなく保護者の試験とした。試験と言っても保護者の学力を計るものではなく、保護者と保育者のパートナーシップを築くために、子育ての考えが幼稚園の保育理念と矛盾しない保護者に来てもらうため、保護者自身の保育観を対象にした相性テストを実施する方法で入園児を決めた。

一方、新制度移行以来の課題であった 2 号児入園に関する問題も本年度は解消された。2 号児入園に関しては幼稚園側に一切関与の余地がなく、父母の就労状況等により市が入園の優先順位を決定するものである。この方法ではどうしても本園に入りたい親が入れずどの園でもよいのでとりあえず応募した親が入園となるケースを避けることができないのである。本園ではこの問題を最小限に留めるために、1 号児と 2 号児の割合を制度の中で可能な限り 1 号児が多くとれるようにしてきた。さらに本年度より 2 号



希望の保護者の方にも 2 号枠が少ないのでその枠に洩れたときのために 1 号の入園試験を併願で受けてもらうことを説明会等でも積極的に進めたため本年度は 2 号児を含む入園児の全園児が 1 号試験を受けた方から決まった。今後も本園の保育に賛同し、どうしても本園の保育で子育てをしたいと考えている方々が入れる仕組みにしていくことが大切だと考える。

H.29.05.01 現在資料	3歳児1学級		4歳児1学級		5歳児1学級		計 3学級		
	1号	2号	1号	2号	1号	2号	1号	2号	計
認定児号数									
進級園児数			24	4	24	7	48	11	59
新入園児数	26	4	5	1	0	0	31	5	36
H.29.05.01 現在在籍数	26	4	29	5	24	7	79	16	95
H.30 年度募集定員数	24	7	0	0	0	0	24	7	31
H.30 年度予測在籍数	24	7	26	4	29	5	79	16	95

## (2)教員募集

近年私立幼稚園では保育園も同様であるが、園児の獲得はもちろん教員の確保も同時にとても難しくなっている。

本年度も引き続きホームページ上に現役教員からのメッセージと写真入のページを公開し本園で生き生きと働く先生たちの様子を広く紹介した。加えて本年度も認定こども園になることで加算されると予定されていた処遇改善加算を全職員に生かし、かつ他園の募集情報を調査したうえで他園よりも良い条件で募集できた。その結果昨年度よりも 1 人多い 5 人の応募者があり 2 人の新人を確保することができた。なお、本年度は大阪健康福祉短期大学からインターン生を 1 人受けたがその方を求人応募者に繋ぐことができ、結果その方を採用することになった。

本年度も本園で働く現役の教員に対しては、私立幼稚園間競争が激化する中で、これも良い、あれも良いと加算方式で膨れ上がる保育内容は、教員を過密労働に追いやる風潮が続いているが、大阪の保育運動の中で学んできた本園では保護者に協力を得て、保育者の子どもたちに向き合う力が削がれることのないように注意してきた。子どもに向

き合う力こそ幼児教育では最も大切であることは言うまでもないからである。

### (3)施設設備

第2園庭は各種行事や球技などの保育に、また PTA やダディーの会の保護者活動の交流の場としても有効に使うことができた。整備面では PTA スリッパと有線マイク設備を無線マイクに更新できた。線につまずくことで使用中に途切れたり、雑音が入ることもなくなりとても快適に使用できるようになった。

### (4)中長期計画その他

認定こども園として2年目を迎えた本年度は、パート職員数が初年度よりもさらに増えたことにより、今まで以上に子どもに目が行き届くようになった。また勤務ローテーションにもゆとりが持て教材研究の時間も増やすことができた。その他新人育成の準備期間としても有効に職員配置できるようになり、後輩職員が先輩の指導方法をより間近で学べる人事体制が組めるようになった。

一方職員が多いことによる盲点があることにも気づかされた年でもあった。職員が多くなったことで各々の職員が園児や園児の保護者と接する機会も多くなったが、その情報の共有ができていないと逆に保護者の不信感につながるという貴重な経験もした。

一職員が得た情報をいかにスムーズに全職員につたえるかが今後の課題となった。保護者から得た情報はその日のうちに他の職員や主任、園長に伝えること。そのシステムの構築が急務となった。来年度は職員間の情報の共有システムを再度見直し、新職員体制をより安定した強固なものにしたいと考える。

長期的には、子どもたちの未来のためにも脱原子力エネルギーと生活スタイルの見直し、再生可能エネルギーの爆発的普及に賛同するとともに、将来の認定こども園の園舎には太陽熱・光利用の再生可能エネルギー・高断熱エコ仕様、地震対策として免震構造などの新企画を反映させた園舎の長期計画を推進するため、今年度も減価償却費に匹敵する備蓄はもちろんのこと確かな再生産のための施設・設備の準備も決算書にあるように進めることができた。